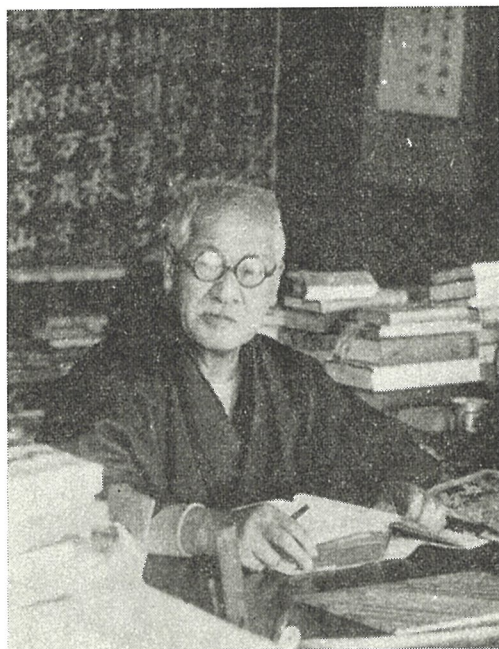




同志社人物誌 (12)

# 徳 富 蘇 峰

岩 本 博 民

1

吼えくるふ波の八重路をのり越えて

心静けき港にぞ入る

昭和三十二年十一月二日、徳富蘇峰先生が松籟颯々たる熱海伊豆山の晚晴草堂で、九十五年の人生の行路を終るに臨んで詠んだ辞世の歌である。

翁は心静かに眠った。その前年、私に寄せられた『衰朽猶存鉄石心』の文字の気魄はこの歌とともに波乱万丈の生涯にたとえ身は朽ちるとも、精神は永遠に生きんとする一片耿

耿の鉄腸の心だったとうなずかされる。

蘇峰は生れながらの新聞記者であった。天才肌の文才のサイビリテータを持った新聞人であった。

しかも、少年十四歳―明治九年すでに新聞記者たらんと志した。熊本にいた少年のとき、すでに父が東京から購読していた東京日日新聞を愛読し、熊本で発行されていた白川新聞、熊本新聞を読んで興味を感じていたが、同志社に入ってから東京、大阪の新聞や雑誌を誰よりも熱心に熟読したという。それが明治十年の西南戦争の前後にわたり、各新聞の記者が現地の報道に健筆をふるうていたことが刺戟を与えたと語っている。青年二十八歳―明治二十三年、国民新聞を創業し、社長兼主筆として雄渾なる筆を縦横にふるうこと三十九年の長年月におよんだ。国民新聞を去ってから現在の毎日新聞に迎えられ、蘇峰独得の世の警醒的一家言をもって紙上を飾った。終戦後も一日として休むことなく、修史や著作や歴史の執筆に親しみ、滾滾として泉のわくがごとく倦むところなかった。

明治、大正、昭和の三代にわたって新聞界、言論界に多くの傑出した人物が輩出したが、正味七十年以上も世の木鐸として一管の筆を持って天下の読者をして魅了した記者は、珍しいといつてあえて過言でないであろう。その思想、気魄、文章、名舌は日本新聞史

上の最高峰であり、不世出の巨人である。東西の学に通じ博學、識見は透徹して新聞界の偉人であった。しかも、九十五歳の死にいたるまで頭脳は明晰で、記憶は寸分の狂いもなかった。

かつて、阿部賢一博士は読売新聞の編集手帳に蘇峰をとらえて「新聞記者としてのあのドン欲なまでの食慾は、ついに晩年まで衰えず……」「家人は陰で書き氣狂のようだ」と評している。翁は日日の新聞の時論のごときはわれわれが朝めしを食うほど筆が早くはしる驚くべき筆力の所有者であり、蘇峰の生涯は書くために生れてきたようなものだ。

## 2

蘇峰は幕末匆忙の文久三年（一八六三）一月二十五日、熊本県水俣に生れた。本来個性が勝って一和し難いのは熊本藩細川氏以前より伝来したる肥後氣質である。天保から安政にかけての熊本の形勢は議論紛々として学派分立し、党派争闘の地であった。

猪一郎は蘇峰と号して噴煙火をはく阿蘇のごとく火山脈派である。情熱性の多い気性である。弟健次郎蘆花においても見る事がで

できる。

父は一敬（淇水と号す）母は久子（矢島氏）という。父は郷士で先代から郷土の開拓事業を行い、学塾を開いて子弟を教育した家柄、真面目で重厚篤実な長者風の人柄であった。

母久子は女傑ともいふべき剛胆にして才氣溢れるの女性であった。

久子は矢島家の出で一人の兄を除いて七人姉妹があった。その姉に蘆花の書いた竹崎順子があり、妹に明治維新の志士、横井小楠の夫人津世子があり、つぎは日本矯風会を創立し、女子教育家として知られた矢島揖子である。すなわち順子、久子、津世子、揖子の四人の姉妹は四賢堂として、いまなお郷土において女傑として謳歌されている。四人の伝記を読むごとに女子教育と母の感化の偉大性を痛感せしめられる。

## 3

不知火の肥後氣質——烈しい血を継いで育った少年猪一郎は九歳にて熊本の東郊、兼坂止水の家塾で漢籍を習い、進歩主義、平民主義のことを教えられた。十一歳で熊本県立の洋学校に入学して、米人ゼンスによってキリ

スト教の感化をうけ、明治九年東京の第一高等学校の前身である英語学校に一時籍をおいたが、京都に新島襄という洋行帰りの先生が同志社を創立されるを聞いて、先生の門をたいて同志社に入った。

先生の純平たる人格に魅せられ、忘れることのできない印象を刻み込まれ、終生師を仰ぐにいたった。しかし、明治十三年五月、卒業の直前に新島先生のとどめるを聞かず「大人とならんと欲せば、自ら大人と思う勿れ」の忠告を胸にひめて京都を去って歩いて東上した。

その後、熊本に帰って二十歳にて大江義塾を起して、郷党青年の人材教育に五年間従事した。その間『第十九世紀日本の青年及教育』の著作を田口鼎軒の東京経済雑誌に転載されるにおよんで識者の間に注目をあびた。ついで明治十九年『将来の日本』の著作を出し、文名大いにあがり、出世作となった。洋文を加味した漢文調の文体を駆使して、当時清新の気風と蘇峰独自の文語体をもって、一躍日本言論界に確乎たる地歩を築いた。そこで塾を閉じ、東京に出て、翌二十年に民友社を創立し、雑誌『国民の友』を発行した。

多年の宿望である雑誌刊行とともに新聞発行の念願を達した。二十三年二月一日、国民新聞第一号を世に出した。その後、蘇峰は新聞経営と筆政を兼ね、社にあること三十九年間、二十八才より六十七才に及んでいる。国民新聞社が二度の焼き打ちと関東震災に遭って社屋を灰燼に帰したが、蘇峰は志猶存すと称して再起復興し、明治・大正・昭和にかけて浮沈変転極りなき荒波に、蘇峰独特の新聞史を編み出した。

創業当時の国民新聞は平民主義を標榜し、ルソーの急進的自由民権で人民の味方をもつて任じていた。国民新聞の蘇峰の麾下には山路愛山、内山魯庵、宮崎湖処子、竹越三叉、高橋五郎、塚越停春、松原廿三堂等俊秀林のごとくであった。当時、青年蘆花は編集室の一隅にあって、つぶさに外国よりの英語の翻

訳と小説にペンを走らせていた。

国民の友の寄稿者中には文豪となった文士が多士済々である。森鷗外、坪内逍遙、国木田独步、佐々木信綱等々。

#### 4

蘇峰は小楠派であった。

尊王攘夷家として奔走した小楠は、欧米諸国の隆盛をいち早く洞察して開国主義となり、明治二年正月五日、京都寺町丸太町下ル下御霊神社前にて刺客に倒れたが、主張したところは国の富強にあった。洛東南禅寺天授庵に葬られた小楠の墓碑を、年少の健次郎が同志社学生時代「孤墳の夕」と題して同志社文学雑誌に発表して、文藻の卓越に先輩同僚の舌を巻かしめた。

小楠の高弟の一人が蘇峰の父一敬である。

満山松柏任風吹浪語當年更在後  
不消遙明渝山志少陽暮時多時

謁新島先生墓 (1912)

蘇峰の思想系統が小楠の実学党の流れをくんで一派相通するものが多分にあった。両者ともに時変に応じて自主独立の立言を行ったことは同一で、立言の基礎が国家であったことも同一であった。蘇峰は初め平民主義から国家主義となり、あるいは帝国主義者となつて一部から非難的となったことは否めない。ここにも小楠流の時代感覚を見出す。

かつて蘆花は愛子夫人に「あにさんは歴史の蛇の目の外側を書く。自分は目を書く」といったが兄は客観的描写にて歴史の華々しい舞台を論評的に書き、自分は直観的描写を歴史の真隨を小説として書いた。

毀譽褒貶は世の常にて、蘇峰の生涯は波乱あり、浮沈もあり、身に振りかかったが、時勢をみるに爛眼——五年先、十年先を見通し、しかも亥年生れの突猪性に富み、万難を排して物事をやり通す気概は鬱勃として貫徹性を失わなかった。その点、根気強い精力絶倫家であったといえよう。

蘇峰は文筆のかたわら、かねて計画していた近世日本国民史の執筆に着手した。「織田氏時代」より稿を起し「明治時代」まで。大正七年、五十六才の時より昭和二十七年九十

才まで、三十五年間はほとんど毎日書き続け、全篇百巻に及んでいる。回数にして一万一千七百八十一回。一巻五百頁とすれば百巻で五万頁となるわけである。尋常一様の筆法で間にあう筈はない。一瀉千里、天馬空を行く筆力とはこのことか。

畢生の修史は悲劇の織田氏に稿を起し、悲劇の南州城山落城に筆を止めている。あたかもギボンのローマ衰亡史に似ている。この近世の歴史的ドラマの全百巻はすでに刊行され、未曾有かつ不朽の大著述であった。

翁は老境の数十年間、毎日早朝五時から六時までには起き、正午は徳富時間として午睡十分（旅行先にても）鼾は雷のようだ。晩は九時から十時には寝る。一日を二分して、新鮮なる気持をもって思索、執筆、読書、時に散歩など。つまり一日を有効に二倍に費す、それは規則的な日常生活であった。自分の力を人間生活の二倍に活用するにあつた。ここから率すると、翁は寿命九十五才の二倍、すなわち、百九十才分を適用され、ほとんど文筆に親しまれたことになる。まことに翁は保健や勉強の時間の合理的使用法の模範的活用者といふべきかなである。

私は昨秋十一月二日多摩霊園の蘇峰先生七周忌、ついで帝國ホテルにて平泉澄博士の記念講演会に出席した。ここに特筆すべきは賀屋興宣氏を蘇峰会長として蘇峰会が多年懸案であつた蘇峰会館を東京にて建設する準備が着々進められている。

小諸城址の藤村記念館を訪れ、また鵜外が寓居したゆかりの観潮楼址に東京文京区民が、一昨秋、区立鵜外記念本郷図書館を設立して初めて参観した。ここにおいて蘇峰記念館の建設の実現はわが国文学史上、最も意義あるものとして大いに期待しているのは敢て私のみでなく全国の蘇峰ファンの多年の悲願である。

## 5

蘇峰先生九十三才の時、私は翁に京都府立盲学校において一場の講演を懇請した発起者である。翁はどう感じられたか同志社創立八十年記念日の昭和三十年十一月二十八日、洛中霜は降り暗雲低迷の午前十時半から盲学校にて講話をされた。

私は少年時代から東京在学はいうに及ばず、翁の晩年に至るまで幾十幾回にもなく講

演や会合あらば聴入つた者である。僅か左の十分間の講話は挨拶ほどに止まるが、ろう盲者に対しても解りやすく、しかも真理をうがつた悲痛の叫びに感じられてならなかった。

老翁は時に死を悟りつつ、すき渡つたサビのある一言一句で聴く者をして等しく心をつたしめ、臉を熱くしたのはただに私のみでなかった。傍にあつた徳富孝子女史ならびに西野看護婦も幾度かハンカチを顔にあてた。野生は蘇史翁の最後の名演説なるかなと思つた。点字毎日は正月号に発表したが、暗眼者にはこれが最初となる。

「皆さま、私はかねて、この日本にも名高き学校にまゐりまして校長先生はじめ鳥居先生にお目にかかることを楽しんでおりましたが、本日それができましたことは、私においてもまことに喜ばしい次第であります。

私は今年九十三才でありまして、人間としては、もう永い月日を暮してほとんど余すところのものはありません。

石炭でいえば、すでに火が燃えて灰に半ばなつてゐるようなものでございます。しかるに、私は今日の午後、同志社の八十年記念におきまして講演をするお約束をしておりますか

ら、只今声を大きく出してしまえば午後は何も余すところはありません。つまりお金が少いからして何んにも使うものは無くなってしまうようなわけであります。それで長いお話はしません。それでどうか皆さんもお許し下さつて、私からお話することは鳥居先生や校長先生に申上げておきますから、よく両先生からお聞き下さることを願います。

ただ一言申上げておくことは、私はイギリスのミルトン（二六〇八一—一六七四）という人をたいへん尊敬しておりました。まだ私が十代の時からミルトンのことを始終考えておりました。

ミルトンというのはイギリスの有名な詩人でありましたが、余りに勉強して遂にお目が見えないようになりました。そのミルトンが目の見えなくなったことについて作った詩があります。

『私は只今何にも目が見えない、世の光から全く遠ざかってしまいました。しかし、私はすべてのことを神様に任せております。私が見えなくなったことを神様の思召しであるかと思ひますから、私は苦しくはありませんけれども、決して神様に向つていろいろ苦情

を申しあげたり、また愚痴を申しあげたり、恨みごとを申しあげたりすることは致しません。

ただ神様、あなたの思召しにより、私は今後一生懸命私の持つておる力をあなたのために捧げます。』

という詩があります。そうしてミルトンはいわゆる『パラダイス・ロスト』これは皆様御承知のミルトンの傑作ばかりでなく、世界における詩の傑作の一つであります。それを目が見えなくなった後に、こしらえたのであります。

私も若い時に始終、ミルトンに私淑して、まして、自分は諸葛孔明（二二一—二三四）ほどのえらい智者にならんでも、どうかミルトンのような人になりたいという希望を持っておりました。

私はその時分にこういう詩を作った。

『畢生の辛苦、何事を期す。自ら癡す、東洋のミルトン。……』

自分はミルトンほどの詩を世に残すことができんばかりでなく、ミルトンに対してまことに申訳けない次第であります。しかし、私は目の見えなくなった後のミルトンに対し

て、今なお、非常な尊敬をもっている次第であります。

皆様のうちに元よりお目の見えないために御不自由をお感じになることもありますが、支那の学者に韓退之（七六八—八二五）という人があつて、その弟子に張籍（一一四〇年前の人）という人があり、張籍もまた有名な詩人であつて、先生の韓退之に勝るとはいわれけれども、劣らぬ程の立派な詩人であつた。先生の韓退之が張籍のある人に紹介した文章にいうには、張籍は目は見えないけれども心はよく見えている。

『目に盲じて心に盲せず』——という文句がありますが、私は実に皆様方がお目が不自由であつても、皆様方の心が決して不自由でない。

心の動くところに従つて如何なる奉公も世の中に尽すことができる次第でありまして、どうぞミルトンや張籍を手本として十分皆様方も御勉強を折つて止まぬ次第であります。

一言これにて御免を蒙ります。』

（大正一〇中学卒、京都ライト・ハウス理事）